

# 復興ヴィジョンの“よりどころ”を求めて

## —東日本大震災復興大槌町日中共同調査設計ワークショップ研修報告—

中川 武 + 中川研究室

### 1. 背景とねらい

〈3・11〉東日本大震災以後、早稲田大学復興拠点研究「文化遺産から学ぶ自然思想と調和した未来型復興住宅・都市計画に関する総合研究」(代表 中川武)の一環として、最も深刻な津波の被害を受けた地域の一つである岩手県大槌町の復興計画を巡って、中国清華大学建築学院と早稲田大学建築学科共同のワークショップを行った。

被災地の復興のための課題は、地域の特徴と被害の深刻さによって千差万別であろうが、たとえば、ある人にとって昨日まであったかけがえのない記憶が、他の人にとってはこの際、別の効率や利便に代替すべきと主張されることもある。また、いずれにしろ、防波堤、土地のかさ上げ、高台移転等々のハードの改変と避難計画の組合せによって、次の津波の危険に備えなければならないだろうが、その案配を誰がどのように決定することになるのか。これもまた五里霧中である。私たちは、神社や民家などの被災した有形文化遺産と民俗芸能や祭などの無形文化遺産の修復、再建、特に有形・無形文化遺産が相互に補完し合い、お互いが、それこそ有形無形の励みによって、地域の復興の力になっていきそうな様々な萌芽をいろんな場所や局面で眼の当りにし、約1年間のサーベイを経て、具体的な再生プロジェクトに絞り込む準備を進めてきた。文化遺産の再生プロジェクトは、勿論地域の総合的な復興計画と連動することには前を進めない。我々なりの考え方の方向をもって地域の住民、行政、各分野の専門家と話し合い、学び、さらに改善した計画案を地域に投げかけるプロセスをどうしても通りたい、というのが我々の願いであった。一方、中国清華大学建築学院の皆さんが東北復興の課題に関心をもたれ、2011年8月に早稲田大学を訪問された。その際、東北大学の意見交換、花巻市や大槌町の共同調査などをを経て、大槌町で共同ワークショップを、ということになった。現実の復興プロセスの困難な状況の中で、我々のような学生グループが入り込むことには、今も賛否論がある。そのことを深く自覚した上で、それでも我々の方に意欲があるか否かが問題なのだ、と思う。幸い、これまでおつきあいいただいた住民グループの専門家の方々そして大槌町と稲門建築会へ寄せられた東北復興研究基金のご協力が得られ、両大学の学生、教師、総勢27名のワークショップがスタートした。

### 2. 活動概要

サイトでのワークショップは、勿論事前調査と準備も大切であるが、現地の空気に触れ、人々との話し合いを通して自分なりに問題を発見し、課題の解決に向けて提案を投げかけるための、ある種神がかり的な短い集中期間が何より大事になる。海外調査や海外学生研修を通して、いかに学生は短期間でも成長が可能か実感してきたことである。

#### (1) 事前調査

しかし、中国側にとって、事前調査の重要性ももっともなことであり、大槌町を中心に、両国や世界の事例も含めて以下のようなテーマで事前学習し、ワークショップの1日目の夜に成果発表情報共有の機会を計った。(早稲田大学) A. 文化遺産空間 B. 福祉空間 C. 産業空間 (清華大学) A. 高齢者住宅の問題について B. 産業空間について C. 文化遺産とリノベーション、復興について

#### (2) オープンレクチャー

訪問先、調査見学地、ワークショップ会場など様々な場所や機会にこれまで復興活動に当たってこられた行政当局者や各分野専門家、関係住民の方々、そして両大学教師陣の説明およびレクチャーの機会をもった。これはワークショップの参加者のみならず関心のある地域の人々にオープンにしたものである。

- ①イントロダクション (4/27、花巻市金婚亭ホール、早大 中川武)
- ②「You and Me」(結海)施設とその活動 (4/27、花巻市金婚亭ホール、金婚亭創設者 阿部美子氏)
- ③アグリビジネス支援の仕組み、公営施設PFIの取り組み (4/27、花巻市金婚亭ホール、東北銀行)
- ④花巻市と大槌町を結ぶ復興支援 (4/27、花巻市金婚亭ホール、増子義久氏他花巻市仮設住宅入居者)
- ⑤花巻市の文化遺産の概要 (4/27、石鳥谷歴史民俗資料館、花巻市賢治まちづくり課課長 高橋久雄氏)
- ⑥石鳥谷南部杜氏と日本酒造 (4/27、石鳥谷歴史民俗資料館、資料館館長 菊池邦雄氏)
- ⑦復興の現状・課題について (4/28、浪板交流促進センター、「まごころ広場うすざわ」代表 白澤良一氏)
- ⑧地域包括住宅ケアの現状と課題 (4/28、浪板交流促進センター、大槌町仮設歯科診療所 医師 沼崎琢也氏)
- ⑨地域型復興住宅の現状と課題 (4/28、浪板交流促進センター、社団法人岩手県建築士事務所協会 筆頭理事 木村清且氏)
- ⑩岩手県の再生可能エネルギー導入の取組について (4/28、浪板交流促進センター、岩手県環境生活部 白井孝明氏)
- ⑪玄海島の復興 (大槌町住民グループ主催) (4/29、赤浜小学校体育館、玄海島復興対策委員会 委員長 細江四男美氏)
- ⑫中国郷土建築調査紹介 (4/29、浪板交流促進センター、清華大 羅副教授)
- ⑬現在集落にみる伝統的集落との関係 (4/29、浪板交流促進センター、中谷教授)
- ⑭文化遺産から学ぶ自然思想 (4/29、浪板交流促進センター、中川教授)
- ⑮大槌町の多様性—神楽を通して (4/29、浪板交流促進センター、白澤鹿子踊保存会会長 東梅英夫氏)
- ⑯清華大・東北大ワークショップ (2008 洛陽、2010 トルコ) 報告 (5/1、浪板交流促進センター、清華大 許教授)
- ⑰木質バイオマスと地域コミュニティ再生 (5/2、浪板交流促進センター、岩手大 伊藤幸准教授)
- ⑱住まいの安全とコミュニティ拠点の創造 (5/2、浪板交流促進センター、早大 古谷教授)

#### (3) 調査およびプログラム、設計演習

A. 文化遺産 B. 福祉空間 C-1, 2. 産業空間を各々のテーマとし、1グループの構成を各大学から2名ずつ計4名として活動を開始、このグループ分けは、事前調査の担当によるが、現地調査の過程での話し合いによって、各々のグループのテーマを改めて構築することとした。この活動・作業はオープンレクチャー等と併行しながらのものであったが、各班に車1台あり、機動的に活動できたと思われ。5/3の最終成果講評会の他、4/30に基本方針検討会、5/1, 2は各グループの中間報告会を行った。

### 3. 成果と今後の課題

5/3の午後、地元住民を招いての公開最終成果講評会を浪板交流促進センターのホールで行った。

- ① Aグループ「祭りとの関係にみる伝承空間の設計」
- ② Bグループ「小釜川の源泉から」
- ③ C-1グループ「郷土さとみち—大槌町の場所の記憶を継承した避難路の提案—」
- ④ C-2グループ「人々の生活における心象風景を見つめ直す」

4グループとも、大槌町全体の地形と伝統的宗教、文化空間の構造や経路、即ち、海、里、山の縦軸を主体とした、安全避難経路、生活、実教、文化空間として見直し、その再生を構想した計画案であった。ハード面が弱いという評判もあったが、参加住民の中から、「伝統的環境の復活につながるこういう考え方もあるんですネ」との評価もあった。

浪板交流促進センターは、我々の活動に十分なスペースがあり、広い地域の調査のための機動力も十部用意できたこと、自炊生活のため学生にはかなりの負担だったであろうが、思わぬ楽しさもあった。特に、大槌町のご協力に感謝したい。清華大側では、半年間のスタジオ課題としての取り組みであったため、事前、事後と継続的に活動された。ワークショップ以後も案を充実発展具体化された。早大側は、様々な立場や学年の混成チームであったため、どちらかといえば、一発勝負という趣きであったと思う。しかし、清華大からの刺激があったか、あるいは大槌町の復興への想いから分らないが、早大の数人も、その後ディベロップに努めてくれた。一部であるが、その成果を掲げて、報告し、今回ワークショップの関係者に感謝申し上げたい。



□早稲田大学清華大学合同 ワークショッププレゼンボード



□大槌町・早稲田大学・清華大学共同調査設計ワークショップ作品展示会



5月に早稲田大学・清華大学合同調査設計ワークショップを行った後にも、両学校の有志がそれぞれで3チームを組み、計画を継続した。

10月7日(日)～10月21日には、5月のワークショップの時点の計画と有志がディベロップさせた計画を小釜神社にて展示し、大槌町の方に見て頂く機会を設けた。

ディベロップさせた最終案はこのボードに掲載されています。



### 清華大学 Group-A

本設計は大垣町の現状調査、「祭」の文化背景を基本とし、大垣町復興計画の優劣分析と組み合わせ、里山・里川・里海の概念を提出し、破壊された場所の修復、元の山の体系を延長し、地形自体により津波の衝撃を緩和します。道路ネットワークを再編し、避難路ポイントをつくります。ランドスケープデザインにより、緑地を村の中に形成し、各エリアをつなぎます。里水においては、大垣町沿岸の歴史変遷を参照し、内側の浅瀬に貯水能力を増強させ、親水空間を形成し、大型防波が人と川・海の間にもたらす障害を解消します。伝統集落の神—人—自然の神聖空間を再構築します。小鎗神社エリアは、神社空間の壁で囲まれた積層感と（山と海の繋がりを意識する）親方向を強調することで、町方居住エリアから神社までの空間のつながりを強めます。神社前は、日常生活の交流と伝統芸能の活動雰囲気重視設計を行いました。公民館から延長した公共空間エリアは、大垣町の月台記憶、若宮神社の記憶と防波堤の親水エリアを含みます。小鎗川の水辺の緑地エリアは、日常の休息としての親水空間としてだけでなく、伝統芸能の練習場や伝統芸能の水辺での活動にも注意を払って設計を行いました。



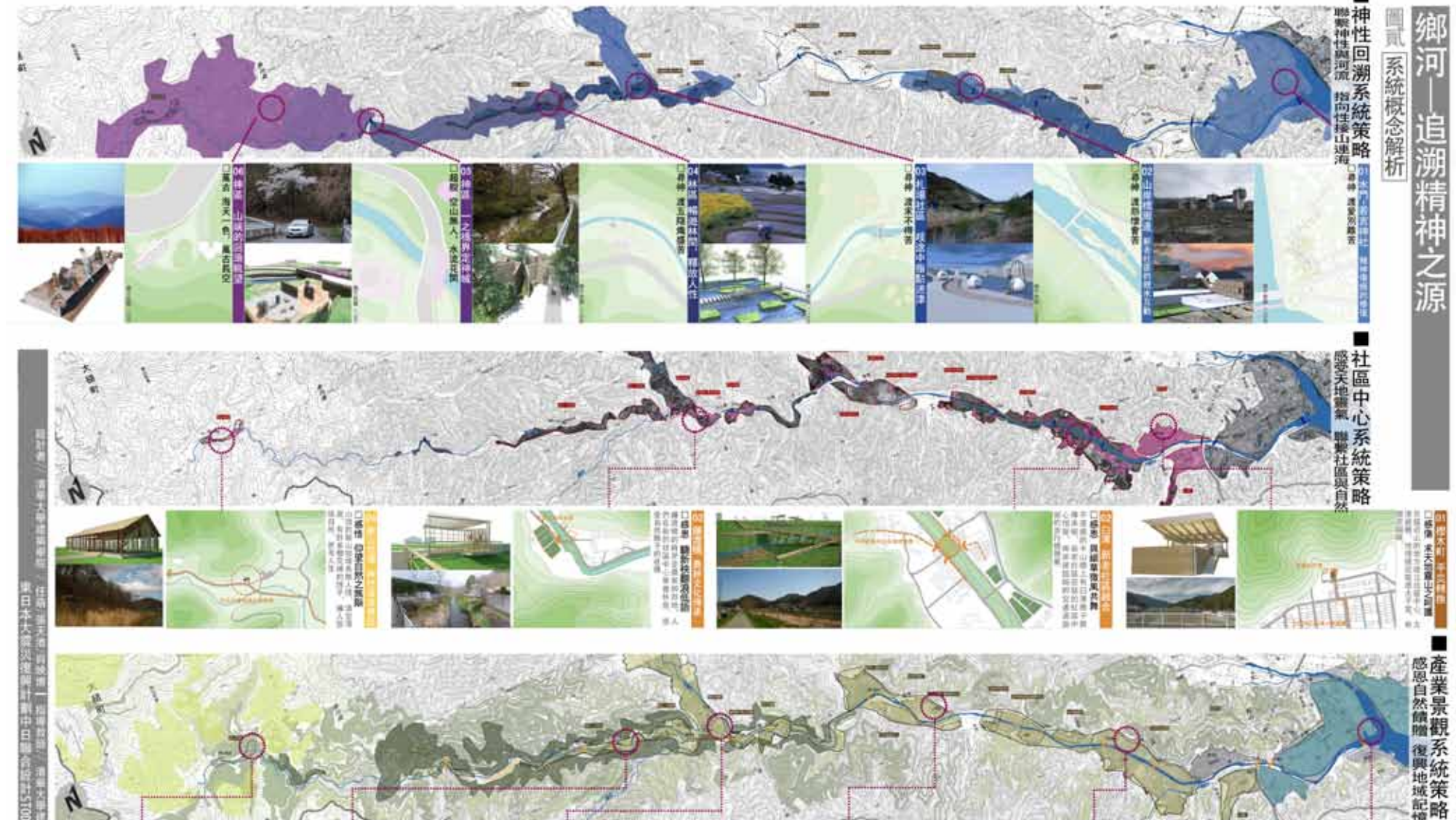
### 清華大学 Group-B

本設計は東日本大震災被災地区の人々の精神的癒しに注目し、小鎗河流域を設計場所として選択し、川沿いのエリアにおける神聖な場所を発掘し、川沿いエリアの人と自然の関係、及び、農業産業景観の復興など三つのシステムの設計を行うことで、住民の精神的な支えを再構築し、地域アイデンティティを強く、山と海の関係を探求し、大垣町災害の復興支援することを目的としています。

第一システムは自然回帰：川沿いエリアの特性を結合し、エリアの中心をつくり、自然の力に対する感受を強めます。

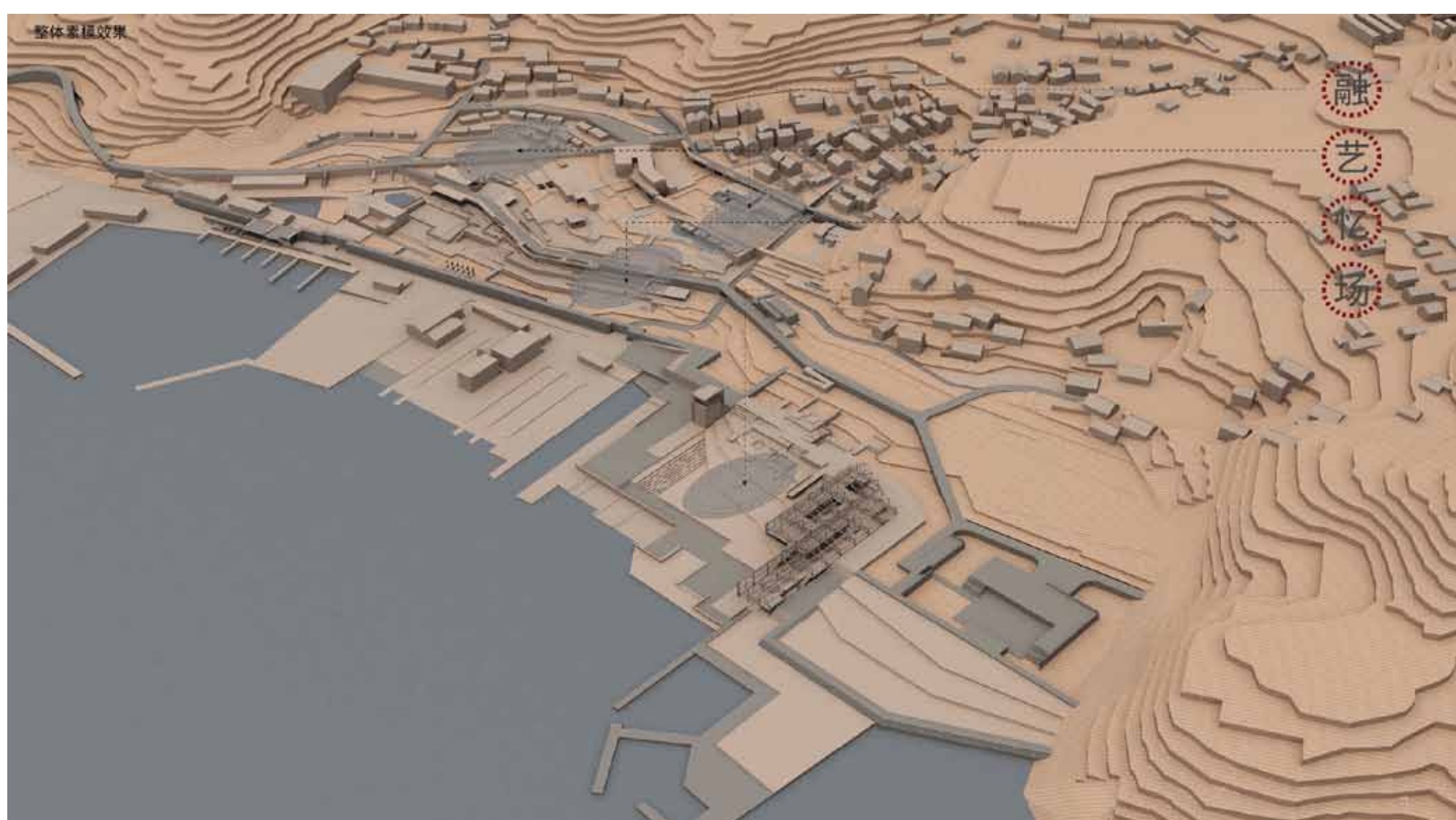
第二システムは産業景観：各ポイントの計画を通して、河流の異なる高度の産業景観シーケンス、自然からの贈りに対する感謝を強調し、地域の記憶を復興します。

第三システムは神聖回帰：川沿いで神聖なポイントを選択し、装置としての公共芸術要素を加え、神聖と河流をつなぎ、河流ポイントを通して山と海をつなぎます。



### 清華大学 Group-C

日本語における「神」とは人々との精神のつながりを指します。東日本大震災後、人々との間の「神」は重要視され、この精神における強いつながりは、勇気と希望が満ちた未来を代表しています。赤井地区は災害により甚大な被害を受け、現在の土地復興計画書は安全性の高さという点から出発し、非常に高い防波堤が村の生活に新しい問題をもたらす点については考慮されていません。私たちは、フィールド調査に基づき、防波堤と村の生活の矛盾解決を試み、防波堤を利用した形としてのつながりを形成しました。これは、災害により破壊された村の生活全体をつなぎ、産業空間と生活空間の間と海と山との間の壁を取り除きます。また一方で、新たな産業を防波堤システムと接続することで、地域の産業復興を促進します。新しい設計の中で、防波堤は「神」の精神の意味を体現し、全体地区の人と生活場所を密接につなぎ、積極的態度で未来に向けて取り組みます。

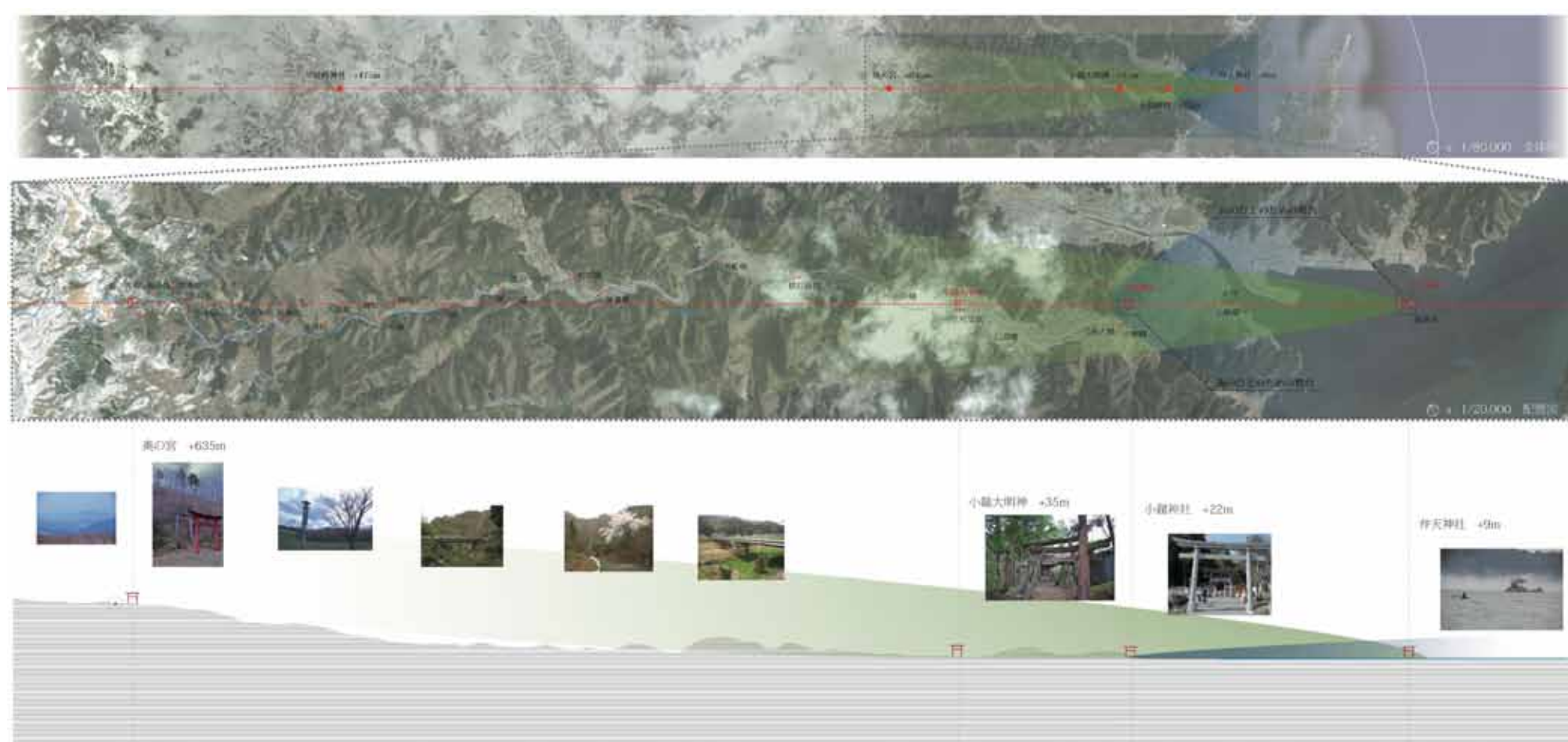


### 早稲田大学 大崎+森田

非日常空間の持殿を中心とする都市計画。発見した軸は、大垣町の歴史を紡ぐ軸である。毎年開催される小鎗祭りと蓮葉島の祭りの際に、獅子踊りを踊る持殿をその軸にのせる。舞殿とともに舞殿に至るまでの祭りのプログラムと御旅所、御旅所の周囲には市場も同時に計る。

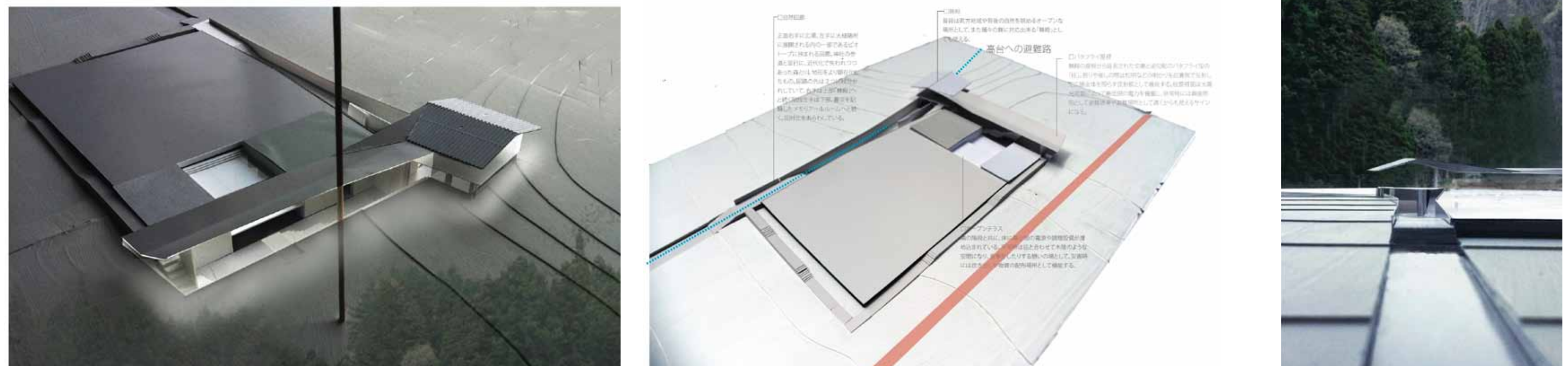
舞殿では、各々の信仰方向へと意識を向けることにより、山と海が連続した大山の祭り極の大地形を意識できる。日常的に山と海の特産物が売買される市場には交流の基盤が形成され、その中心には御旅所がある。日常生活空間は祭りの際、儀式空間へと変質し、日常と非日常は表裏一体に展開される。

既存の復興計画に対して、大垣の批判的軸と市場を連動させた複合計画を推進し、その計画を背景に大垣町民が意欲的に復興に参加することで、以前よりある大垣の固有性を持った生活のあり方や共同体を復興できると考える。



### 早稲田大学 松岡+伊藤

災害時にも拠点となるように庇の屋根根元は太陽電池を設置し、祭りの際は松明などの明かりが庇裏面に反射する事で広場全体を明るくする間接照明として機能する（災害時には太陽電池による人工照明を点灯）。壊滅的な被害を受けた町方において、遠方から集まる事を考えると、現代的なインフラを提供する場所の整備がより一層必要である。施設にはインフラやトイレに加え、踊りに使用する道具等の保管場所や簡易的な更衣室を設ける。庇下部には簡易的な調理ユニットを埋め込み、若干の風雨や寒暖をしのげる工夫を施す。記念室や展示を通して伝承するのではなく、伝承館が行われる祭りや周囲の親水、新緑空間を訪れる人々の居心地の良さや最低限のインフラを提供する拠点として整備する事でそれらをサポート、継続させる仕組みをもって文化や世代の伝承を促進する。



### 早稲田大学 田淵+百野

記録に深く刻まれた道を掘り起こす事は過去との連続の中で自らの位置を確かめることである。それは住民たちによる復興の拠り所として新たな町の骨格となる。復興にあたって本提案ではまずかつての神輿の巡行路の整備からはじめる。郷土のみちづくりには住民が主体となり、自分と場所との関係性、過去の記憶をたぐりよせながら新たに道を生まれかわらせていく。

